

第16回南のシナリオ大賞

優秀賞

ア・イ・シ・テ・ル

橋本直仁

「ア・イ・シ・テ・ル」あらすじ

SE 激しい蝉の声が響き渡る。

近未来、あるウイルスに感染した加藤和也は自宅アパートに隔離。完治する希望を持って、検査官の指示に従い、不安な日々。和也には結婚を約束した彼女、玲奈がいたが、隔離を境に和也から距離をおいていた。進行する和也の病状。手足が腐り始め、黒ずみ、やがて、ぼとりと腕が取れてしまった。和也の精神は少しづつ破壊されていく。検査官より送付されたロボット義手義足を付け、何とか生きる和也。検査官たちにとって、和也は単なる病気のモルモットとなっていた。それから1年が過ぎようとしていた、彼女の玲奈が、和也のアパートに会いに来る。しかし、部屋から現れたのは、全身の9割が機械のロボットとなった和也だった。記憶も失いかけていた和也だが、玲奈の姿を見て人間らしさを取り戻す。しかし、アパートを飛び出した和也の体は爆発する。システムが作動し、隔離場所から離れた者は爆破される運命のだった。

和也M「どこから来て、どこに行くのか？ 誰にも分からない。でも、それはゆっくりと、確実に、俺たちの生活の中に食い込んできた」

SE ぼたりぼたりとシンクに水が落ちる音。

和也M「ただ分かっている事は、俺は孤独になっただけだ。誰にも会えず、どこにも行けない、俺は、俺は、毎日ここで」

SE スマホの着信音

和也「誰だ？ ああ、検査官」

SE スマホの着信音が続き、止まる。

登場人物

加藤和也 (30) 会社員

今村玲奈 (28) 会社員、和也の彼女

大田耕三 (50) 検査官

和也M「検疫官、しつこい、毎日、毎日同じ時間に」

SE スマホの着信音

和也M「いつの間にか、右手の人差し指が真っ黒になっていた。指だけバーナーで焼いたみたいに、でも痛みはなかった、それが余計に、俺の不安感を煽ってきた」

SE 電話をとる音

和也「もしもし……」

大田「加藤和也さんですね、私は検疫官の大

田耕三ですが……」

和也「はい、知っています」

大田「ああ、失礼しました。そうですね、

定期連絡です。どうですか、お体の変化、なにかありますか？」

和也「特に」

大田「そうですね？ 発症1ヶ月なんで、全身

の痒みのあとで、どこか部位が黒ずんで来る

と思いますか……」

和也「それは、ない、です」

大田「正確に報告お願いしますね、それに合

わせて投薬内容も変わるので、正確な情報

お知らせいただかないと」

和也「だから、ない、です」

大田「わかりました、定期配給はちゃんと届

いてますか？ 生活する上で足りないもの

ないですよね」

和也「はい」

大田「御存じだと思いますが、人と会うのは

厳禁です」

和也「会ってません」

大田「あなたはもちろん、会った方も隔離さ

れますので」

和也「だから、会ってないって！」

大田「当然ですが、外出も厳禁です。1分以

上10メートルご自宅から離れますと、作動

しますので」

和也「知っています」

大田「先月だけで、作動500件あるので、必

ず、お守りください、では」

和也「あの……」

大田「どうしました？」

和也「いま、気づいたんですが、指、黒ずみ

始めています」

大田「おお、そうですね、しつかり伝えてく

ださいね。進行段階によって投薬内容変わ

りますので」

和也「あの、俺、治りますか？」

大田「ははは、安心してください、正確に我々

に症状をお伝えいただければ、しっかりと対

応しますので」

和也「治りますよね？」

大田「大丈夫ですよ。正確に伝えてください」

SE 激しい雨が降っている。

和也M「永遠に終わらない拷問のような日々が過ぎていった。肌寒く秋が近づき始めていた。病状もどんどんと進行していた。ネットで簡単に手に入る典型的な進行だった。このままでは俺は……ついに右腕が肘から指先まで、真っ黒になつていた」

SE 玄関の呼び鈴

和也M「だれだ？ いや、だれでもいい」

SE 玄関の呼び鈴

和也「どなたですか？」

玲奈「わたし……」

和也「玲奈……」

玲奈「和也さん、私……」

和也「何しに来たんだ」

玲奈「声聞きたくて」

和也「もう、俺たちは……」

玲奈「電話出てくれないし」

和也「忘れてくれ、俺のことは」

玲奈「でも、私……」

和也「知ってるだろ？ 俺の病気」

玲奈「でもね、私……」

和也「忘れて欲しい、俺はもう、忘れた」

玲奈「覚えてますか？今日は10月14日」

和也「何？」

玲奈「本当なら、今日、10月14日、結婚式だったよ」

和也「ああ、そうか、そうだったね」

玲奈「付き合つて、初めて行った長崎旅行で言ってくれたじゃん、ちようど3年後の14日に結婚しようつて、言ってくれたじゃん！」

和也「もう、ほんと……忘れたよ」

玲奈「私は治ると信じてる」

和也「無理だ」

玲奈「大丈夫、治ってる人だっているじゃん」

和也「もう、来ないでくれ」

玲奈「私、信じてるから」

SE ドローンが飛ぶ音。

ドローン「目的地確認、加藤和也さん邸。配布物、四肢ユニット、降下いたします」

SE ドローンが飛ぶ音や電子音。

和也M「腕が取れた、簡単に。取れたんだ。ほんの前まで俺についていた右腕が、ぼとりと取れた。血は出なかった、痛くもなかった、でも、腕は取れたんだ」

SE ぼたりぼたりと取れた腕に水が落ちる音。

SE ぼたりぼたりと取れた腕に水が落ちる音。

和也M「シンクに取れた腕を置いた。なぜかわからないけど、それがいいって思えた」

SE 玄関のチャイムが鳴る。

ドローン「四肢ユニットお届けします」

てみた」

SE グイーンと低い機械音

SE どきりと箱が落ちる音。

SE ギュインと電源が入る音。

和也「うぎゃああ！ 痛い！ 痛い！」

和也M「なんだ？ 四肢？ ユニット？」

電子音「コノタビハ、シシユニットゴリヨウ

電子音「スコシ、イタイトキ、アリマス」

SE 足を引きずり歩く音。

イタダキ、アリガトウゴザイマス。トリツ

和也「うるさい！ くそ！ 痛い！」

ドアをガチャリと開ける音。

ケホウホウヲゴセツメイシマス。マズハハ

コカラ、ウデユニットヲトリダシテ、デン

ゲンオン！」

SE 踏みつけて壊れる音。

和也M「ドアを開けると、ドローンがいつもの配給とは違う50センチ四方の箱を置いていった。箱の上部に「四肢ユニット」と記されている」

和也「右腕はこれか」

和也M「しばらくすると、右腕がなじんでき

SE 足を引きずり歩き、

SE ギュインと電源が入る音。

てみた」

どんと座る音。

電子音「ツケタイブブンニオシツケテクダサイ」

SE ウインウインと機械の腕が動く音

和也M「箱を開けると、ロボットの腕と足がそれぞれ2本出てきた。それに説明書と書かれたボックスが。ボックスのスイッチを押した

和也「押し付ければいいのか」

和也「あつ、腕、腕が戻った、はは、俺の腕が戻った、腕、戻ったんだ！」

SE スマホの着信音。

和也「もしもし」

大田「どうです？新しい腕と足つけていたばかりですか？」

和也「腕は付けたよ……」

大田「腕が取れると不自由でしょ、最新型なんで、よく改良されて使い勝手良いですよ」

右足はまだ取れてないんですか？」

和也「取れてない」

大田の声「1週間くらいで取れると思うので、自分で切ってもらって、機械の足付けたほうが、病気の進みが遅れますよ」

和也「自分で、切るのか？」

大田「痛みはないはずだから簡単でしょ」

和也「自分で切るのか……」

大田「取れた各部の写真の送付もお願いしますよ。正確に現状把握したいので」

SE 吹雪の音。

和也M「自分の足を自分で切り落とすなんてばかげている。そんな事出来るはずないだろう」

でも、俺の右足は膝から下が真っ黒で、もう何も感じない」

大田M「自分で切ればいいんですよ！」

SE シャワーが流れる音。

和也M「俺は決心した、絶対に、治すんだ」

そして、もう一度玲奈と、玲奈と、そう、来年になっても、もっと先になっても、いつかの10月14日に結婚するんだ！俺はするんだ！」

SE 刃物が触れ合う音。

和也M「機械の腕で持ったナイフを、ゆっくりと右ひざに突き立てた」

SE ぐにやりと肉を切る音

和也M「どす黒い血が、シャワーにどろどろと流されていった」

SE ガリガリと骨をナイフで切る音。

和也M「何も感じなかった。俺はただ一心不乱に、骨にナイフを突き立てていた」

SE シャワーが流れる音。

和也M「ああ、俺はいつまで俺でいられるんだ……」

SE 蝉の音が響き渡る。

玲奈M「どうしても忘れられない！ 私は和也君のことが好きなんだ。1年が過ぎている。何度電話しても、和也君は電話に出てくれ

ない。私は和也君に会いたい！」

SE 和也が追いかける機械音。

SE コツコツと階段を上がる音。

玲奈「いやだ！ 来ないで！ 和也君じゃないー！」

玲奈M「私は今も和也君を愛している」

和也「オレ、オレ、カズヤ、スキ！」

SE 呼び鈴を押す音。

玲奈「助けて！ 来ないで！」

ウィーンとロボットが歩く音。

玲奈「嫌！ 嫌！ 来ないで！」

ドアが開く音。

和也「ア・イ・シ・テ・ル！」

玲奈「和也君……そんな」

玲奈「嫌！ 化け物！ 嫌！」

和也「アナタハダレデスカ？」

電子音「ケイコク！ カクリヨリ10メートル

玲奈M「ロボットが立っていた。鼻から上だけ

ハナレルト、バクハツ、ケイコク、バクハツ！」

け黒い人間の……顔」

SE 激しい爆発、

SE 玲奈の逃げ出す足音。

金属片が飛び散る音。

和也「ダレデスカ？ オボエテル、オレ、オボ

(終わり)

エテル！」